新約聖書 マルコによる福音書 6 章 30 節―34 節と 53 節―56 節（新共同訳）

30 さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったこと
や教えたことを残らず報告した。31 イエスは、「さあ、あなたがただけで人里
離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多く
て、食事をする暇もなかったからである。32 そこで、一同は舟に乗って、自分
たちだけで人里離れた所へ行った。33 ところが、多くの人々は彼らが出かけて
行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らよ
り先に着いた。34 イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない
羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。

53 こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いて舟をつない
だ。54 一行が舟から上がると、すぐに人々はイエスと知って、55 その地方をく
まなく走り回り、どこでもイエスがおられると聞けば、そこへ病人を床に乗せ
て運び始めた。56 村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、病人を広
場に置き、せめてその服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は
皆いやされた。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「深く憐れみ」

ボンヘッファーという牧師は、こう述べています。「イエスの愛は、それが他者を助けるものであるなら、いかなる痛み・放棄・苦しみをもいとわない愛である」。

さて、本日の福音書の冒頭で、宣教から帰った弟子たちは「使徒」（ギリシア語でアポストロス）と呼ばれています。「使徒」とは「遣わされた者」という意味です。イエスの代理として伝道に遣わされ、戻ってきた弟子たちは、イエスに自分たちの働きを、喜びのうちに「残らず」報告します。なぜなら、遣わされた者は、遣わした方を喜ばせたいがために働くからです。

キリストの使徒たちは、人間同士の間での名誉や賞賛からではなく、主イエス・キリストにとって自分たちが意味のある存在であることに、何よりも喜びと幸福を見出すのです。

本日の聖書の場面では、これまでイエスのもとに救いを求めて来ていた人々が、今や、弟子たちのところにも集まって来るようになったとあります。弟子たちも、イエスのように悔い改めを宣べ伝え、悪霊を追放し、病人をいやすようになっていたからです（マルコ 6:12-13）。

人々が弟子たちのところに押しかけて来て、食事をする暇すらない状況の中、イエスは弟子たちにこう言いました。「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」。

弟子たちに対する、イエスの慈愛に満ちた言葉がここにあります。イエスは弟子たちに休息を与えようとします。人間にとって、自分の働きの場、いつもいる場所から退き、静かに過ごすことが必要な時があります。日々の慌ただしさ

や忙しさの中、また疲れている時は、心身を休めると共に、沈黙と祈りの中で自己を見つめ直す時が必要なのです。

イエスと弟子たちは舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行きました。しかしそこにも、イエスを求めて集まって来た多くの人々がいました。

イエス一行が舟で湖を横切ったにもかかわらず、殺到した群衆は湖沿いの陸路を移動して、イエス一行が対岸に着くのを待ち構えていたと言います。常識的には、徒歩の人々が湖を迂回して、湖上を直進する舟に追いつけるわけがないと思うのですが、それだけ集まってきた人々の思いが強く、火事場の力というか、イエスにすがろうとする思いが強かったのでしょう。

イエスは大勢の群衆の「飼い主のいない羊のような有様」に目を留め、深く憐れみ、いろいろと教え始めました。イエスの慈しみとほとばしる愛は、この飼い主のいない羊のような見捨てられた群れ、ご自分の周りにいる群衆を包みます。

イエスが弟子たちに命じた休息は、群衆によって中断されました。それでもイエスの愛は、それが人々を助けるものであるなら、計画していたことの中断、放棄もいといません。

人々に注ぐ慈愛に満ちたイエスの眼差し、激しく揺さぶられるイエスの心に沸き上がる憐れみの思い、それがイエスの救いのわざの源泉です。

主イエス・キリストは、飢え渇き、いやしを求めている人々に対して、そのような思いで突き動かされます。イエスは、痛み・苦しみを受ける人々の側にご自身の身を置き、神の言葉を宣べ伝えました。一人ひとりが神の言葉によって命を与えられ、生きるためです。

これらの出来事ののち、再び一行は舟で湖を渡り、ゲネサレトの土地に着きます。イエスが上陸すると、多くの人々が病人を担架に乗せてイエスのもとに運んできました。イエスが奇跡のわざをなし、どんな病気でもいやされるという評判が、ますます広まっていたからです。人々の連れて来た病人があまりにも多かったので、家の中に入りきれなかったのでしょう。病人たちは「広場」に置かれました。それは、災害などの緊急時のような非日常的な光景だったことでしょう。

人々は、病人たちが、イエスの服のすそにでもよいから、触れることを願いました。そして、触れた者はいやされたのです。

この福音書の箇所では、ゲレサレトの地でのイエスの働きが要約されています。ここで表されているのは、イエスを熱烈に歓迎・支持する民衆の姿です。彼らは病気の治癒を求めてイエスのもとにやってきます。人々は、イエスの説く神の福音よりも、とにかく病気が治癒するというこの世的な願いのもとに、イエスのもとに殺到します。

ですがここで注目したいのは、人々が、病人を担架に乗せて運び、せめてイエ

スの服のすそにでも病人に触れされてほしいと願ったことです。病気で苦しんでいる人をみんなが助けようとしている姿がここにあります。自分の病気を治してほしいと言っているのではなく、隣人の病気の治癒を願っているのです。病気を癒してほしいという願いは「この世的な」動機であるかもしれませんが、それは決して「利己的」な動機ではありません。

マルコ福音書は「触れた者は皆いやされた」という言葉で、この場面を締め括っています。イエスは人々のそのような願いを受け入れ、病人を癒したのです。

病人や怪我人を乗せて運ぶ「担架」は、人間同士の間での愛の象徴の道具のようにも思えます。

私にとって、「担架」から思い出されることがあります。

それは、過去に目にした戦場カメラマンが撮ったある写真です。

そこには、負傷した敵の兵士を、担架に乗せて運ぶ兵士の姿が映し出されていました。

味方ではなく、敵の兵士を助けるために担架で運ぶその姿には、まさに無償の愛を感じました。

敵の兵士を乗せて担架で運んでいる兵士の顔は、和やかで喜びにあふれていました。

無償の愛で人を助けるということは、自らにも大きな喜びと幸福をもたらすのでしょう。

それは、「神の国」を思わされる写真でした。

本日の福音書の中で、イエスが群衆を「深く憐れんだ」ことが記されています。「深く憐れむ」とは、相手の痛みを自らの痛みとして共感することです。これは「腸（はらわた）がちぎれる思いに駆られる」とも訳されます。イエスの「憐れみ」は「同情」を超えて、「共苦」―― 共に同じ苦しみを苦しむところまで到達しています。

ですが、共に同じ苦しみを苦しむとは言っても、イエスの「憐れみ」には、必ずそれを越えたものがあるのです。ただ相手の苦しみを自分のものにして、苦しんでいる相手のコピーのようになるわけではありません。痛み・苦しみの中にいる人間を見る時のイエスの眼差しに、祝福と慈しみがあることが、最も要となる重要なことなのではないでしょうか。

ちなみに先ほどの写真の、負傷した敵の兵士を助けるために担架で運んでいた兵士の表情も、何かユーモアのあるジョークでも言いながら運んでいたのではないかとも思えるような、明るく朗らかなものでした。

毎日、暑い日が続きます。

私たちも、主イエス・キリストから深く憐れまれ、祝福されている存在であることを覚え、どんな状況においても、ユーモアと朗らかさを持ち続けながら、祈りと共に歩んで行きましょう。

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

旧約聖書 エレミヤ書 23 章 1 節―6 節（新共同訳）

1「災いだ、わたしの牧場の羊の群れを滅ぼし散らす牧者たちは」と主は言われる。2それゆえ、イスラエルの神、主はわたしの民を牧する牧者たちについて、こう言われる。「あなたたちは、わたしの羊の群れを散らし、追い払うばかりで、顧みることをしなかった。わたしはあなたたちの悪い行いを罰する」と主は言われる。
3「このわたしが、群れの残った羊を、追いやったあらゆる国々から集め、もとの牧場に帰らせる。群れは子を産み、数を増やす。4彼らを牧する牧者をわたしは立てる。群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない」と主は言われる。
5見よ、このような日が来る、と主は言われる。わたしはダビデのために正しい若枝を起こす。王は治め、栄え／この国に正義と恵みの業を行う。
6彼の代にユダは救われ／イスラエルは安らかに住む。彼の名は、「主は我らの救い」と呼ばれる。

新約聖書 エフェソの信徒への手紙 2 章 11 節―22 節（新共同訳）

11だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。12また、そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。13しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。
14実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、15規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、16十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。17キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。18それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。19従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、20使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、21キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。22キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

教会讃美歌 181 番「ここにいます」1,2,3 節、238 番「いのちのかて」1,2 節、289 番「すべてのひとに」1,2,3 節、200 番「まことの神よ」1 節